

オンライン教育が切り拓く 「これから」

倉林 眞砂斗

日本私立大学連盟
国際連携委員会委員長
(城西国際大学副学長・
観光学部教授)

1 「初めて」尽くしの中で

現在もなお世界はコロナ禍の只中にある。入国緩和策を採る国がある一方で、これまで以上の厳しいロックダウンが続く国もある。我が国でもオンライン活用が定着し、またワクチン接種も進む中、所定の方針のもと待ち焦がれた学生の派遣、受け入れが徐々にではあるがようやく動き始めた。

コロナ禍は、目に入っていないながら見えていなかった繋がりが存在を浮き彫りにし、個人から国レベルまでの多種多様

な「気づき」をもたらした。一方で、あからさまになった相違ゆえに理解し合えない先鋭な対立をも生み出し、その行方はなおも見定めにくい。あたかも人類の英知が試されているかのようである。

日本私立大学連盟国際連携委員会は、出入国管理に係る速やかな情報共有をという要望に応えるべく、シンポジウムや情報交換会等を継続的に開催しつつ、これまでの活動と関連づけながら『グローバル教育の拡充』と題する報告書をまとめた。これは本連盟が『ポストコロナ時代の大学のあり方』を公にしたことを承け、コロナ禍の行方が未だに判然としない時だからこそ、中長期的な視点からグローバル教育の方向性をまとめておくべきとの考えによる。

各々の取りまとめはオンライン会議で行われ、当然のように一堂に会していた頃とは様変わりした。もちろん、やむを得ない状況にあったからであるが、事前準備や意見交換を経て参加者の考え方が集約されていく様は、ある種の高揚感をもってギア・チェンジすべき時の到来を感じさせるプロセスでもあったように思う。教育現場の急速なオンライン化を目の当たりにした今こそ、「これから」に向けての積極的なオンライン活用を考えたい。

2 「好機到来」という受け止め

コロナ禍のかなり早い段階から、相当数の大学がオンライン環境の整備を急ピッチで進めたようである。やむなく導入され瞬く間に定着したオンライン授業ではあったが、これまで当然とされてきた対面での授業や指導について再考し、新たな仕組み作りに挑む機会ともなった。この間、留学の派遣と受け入れは厳しい制約を受けてほぼ停止状態に陥ったが、本年5月時点での規制緩和に向けた動きは、次なるステージへの期待感を抱かせる。

そしてグローバル教育全般にわたって、オンラインを活用してこそその面が見え始めてきた。例えば、海外との交流プログラムや集中講義、留学プログラム等、単位認定も含めて多角的に展開されつつある。また実際に留学する場合でも、事前の指導や準備等でのオンライン活用は効率的である。コロナ禍を経て単に元に戻すのではなく、新たな機会と捉えて幅と厚みのあるキャンパス内のグローバル化を促進したい。この点、我が国のインバウンドに係る目論見も大きく外れたが、今やオンラインツアーという形での新たな価値創りが進む。

公にされた様々な数字を見ると、確かに我が国の停滞性は覆い隠しようもない。コロナ禍とは関わりなく、気候変動や食料生産、エネルギー問題、そして我が国の人口減少、医療・介護、長期停滞等について考えざるを得ない機会が格段に増えた。何よりコロナ禍それ自体がグローバルな課題である。いずれも枢要でありながら、なぜかそれぞれの繋がりは見えにくく、また受け止め方の較差も根深いことに改めて気づかされる。

いずれの分野を専門とするにせよ、「これから」を担う学生達はこれらの課題に向き合い続けなければならず、だからこそ今傍観して先送りするわけにはいかない。まずは各々が繋がり合う様に目を向けてもらい、腑に落ちて「我が事」として受け止めるための工夫を重ねたい。今こそ「好機到来」と考える所以である。

3 「日本」を捉える視点

加速度的にグローバル化が進む世界での日本の立ち位置や、「あるべき姿」については様々に論じられている。漫画やアニメ、ゲーム等のビジュアルカルチャーを介した日本のイメージは定着した感があり、これらが音楽や食文化の魅

力をも引き出す。コロナ禍以前には、これらの体験価値が国内外の人々を惹き付けたのは事実である。これを5年後、10年後へと繋げて、我が国の強みとし続けることはできるであろうか。

経済面から見ると、我が国は高度経済成長の最中に顕在化し始めた資本主義の構造変化、すなわちモノそのものではなく目に見えない価値要素に重きを置く本質転換に対応しきれず、長期停滞を余儀なくされているという現実がある。いわゆる知識社会への不適應である。求められる力も当然に変化しており、価値転換を果たせずに機会損失した日本企業の姿は、新しい時代に備えるべき高等教育のあり方を考える上で示唆的である。

「これから」を生きる学生達のために、一定程度の予見のもと、我が国なりのグローバル教育のあり方を問い、オンライン活用と併せた具体的な取り組みを再起動させ、世界に向き合える力の涵養^{かんよう}を目指したい。長い歴史を経て形成された「日本らしさ」は、当然に活かしてよい。一方で、「日本らしさ」ゆえに見えにくいことを看過しない感性を磨き、これまで無意識のうちに前提としてきた固有論理やチグハグ感を払拭すべきである。

働き方改革の一環として、リモートワークの普及はさらに加速する。当然のことながら、質の高いリモートワークに対応できる人材の育成が求められ、学生達のオンライン慣れも不可欠となる。いずれオンラインでの多言語同時対応システムが普及すれば、一緒に仕事をする集団の規模や構成員は様変わりし、否応のない多国籍環境の中でビジネス仕様の「異文化理解力」を発揮せざるを得なくなる。とはいえ海外インターンシップの機会はずと限られる。この点、多様性を力に変えることを念頭に、実践的かつ汎用性の高い学修プログラムを整え、オンライン活用と併せて全学横断的なグローバル教育の展開を検討してもよい。

4 共有・共感を阻むもの

「これまで」の経験知や延長線上の考え方にとらわれることなく、自分が生きていく時代をイメージしながら世界の動きや先進事例を学ぶことは学生達にとって大切である。将来予測の当否が重要なのではなく、「我が事」として「これから」に向き合い、想像力を働かせ、視点を広げて問いかけ、さらに問題意識を掘り下げることは、学生自身のキャリア・プランニングにも通じるからである。この点、グ

ローバル教育に限らず、オンライン活用の強みは遺憾なく発揮されるべきである。

今広く社会で求められているのは「繋げる仕組みを創り出すこと」、「繋げて価値を生み出すこと」である。例えば、生産者と消費者はもとより、生産者同士や消費者同士がオンラインで繋がることにより、これまでになかったビッグチャンスが生まれる可能性がある。新しく繋いで未だ見ぬ価値を引き出そうとする動きは、今後ますます強まるに違いない。では、大学においてはいかがであろうか。

大学は時代に即した人材育成を志向するほど、家畜飼料を貯蔵するサイロが林立する姿のように映りやすい。各々の「専門性」ゆえに、サイロはサイロとして大切な役割を担う。しかし、文系・理系という区分や学部・学科という組織、さらには専門分野等の個別面のみを強調し過ぎると、固有の価値観や論理が優先されて他のサイロは目に入りにくくなる。これでは心動かす共感は生まれにくい。むしろ、サイロの特性を踏まえて繋いでみることで新たな視点が生まれ、おそらく機会損失のリスクも低減させられる。

いかなる専門分野に身を置くにせよ、視野を広げながら時代の潮流を観じる感性にも磨きをかけたい。そうするこ

とで各々の学修成果を活かす機会は広がり、様々な「先見の明」も活かされ、重大な機会損失を回避できるかも知れない。我が国の長期停滞を顧みれば、せつかくの「先見の明」が活かされないことが随所で起きていたように思える。サイロを跨いで繋ぐことへの果敢な挑戦は、「これから」を見据えた人材育成の基盤たり得るものであり、それにはオンライン活用がやはり欠かせない。

5 「繋ぎ」が惹起^{じゃっき}する学び

これまでキャンパス立地や時間の確保、教室規模の制約等を理由に実施困難とされてきたことは少なくない。オンライン環境の拡充は、ライブ配信かオンデマンド配信かを問わず、これまでの制約を超えて多彩な機会提供を可能にする。とりわけ複数の専門分野の知見に基づく「気づき」をテコに、新たな価値創造へと昇華させるための学際的な教育・研究にとっては効率的かつ効果的であろう。

さらに踏み込みたいのは、専門分野はもとより隣接分野をも超える幅広い共有である。「これから」を射程に入れて有用と判断する専門分野の知見を集約し、分かりやすく体系づけ、全学的にオンライン配信する。もちろん建学の精

神や教育理念のもと、「何のために」「どのように」「どこまで」を明確にした教育プログラムとして整備する。要するに、専門的知見がもたらす「先見の明」を広く共有し、適切に活かすための工夫である。

これをリベラルアーツ教育あるいは教養教育に含めるかはさておき、総合的な意味づけを経て、「繋ぐこと」に目を向けて専門とは次元の異なる知的刺激を惹起する、また学外とも共有して波及的な意識形成を促す、さらには裾広の共感を呼び起こすことに期待したい。せつかくの「先見の明」を当該分野のみに留め置くのはもったいない。むしろ、「専門性」と「汎用性」を兼ね備えた、サイロを貫き通す横申として機能化させ、学生達が生きていく時代について考え行動することの習慣づけを図るのである。これは格別に大きな予算は必要とせず、ある意味で教育資源を有効活用することに繋がる。

本来、専門的な視点から「深く掘り下げる」と、幅広い視点から「繋ぎ合わせる」とは矛盾しない。むしろ双方を適切に往還することで、思いもよらない刺激がもたらされる。だからこそ、オンライン環境の拡充を経た今、先送りすることなく将来への強い想いを込めて、大学だからできる

知的営みの全学展開に挑戦したい。ただし、さらなる社会変化が加速する中、新たな挑戦の手応え感や成果を得るための時間的猶予は限られるであろう。それでも危機意識を広く共有できるならば、「これから」仕様のリカレント教育が起動する可能性もまた高まるはずである。

6 不断の挑戦を促す価値観

大学の点検評価活動に主体的に携わって想うのは、今日の前にいる学生達のために「やるべきこと」はすぐにでもやりたい、ということである。「できること」ではなく「やるべきこと」をやるために、教職員自らが志を持って生涯学習に臨むことも必要であろう。無秩序に増え続ける情報に対峙する上で、教職員も想像力や予見力を磨きつつ、繋いで考えて行動することを習慣づけたい。この点でも、オンライン活用は可能性を広げてくれる。

建学の精神のもと特色ある教育展開をしやすい私立大学の良さ、強みを活かし、そこに集う教職員が一丸となって自らの生涯学習のもと、「これから」を見据えた教育指導体制の確立、刷新を志す。学生達に生きていく時代を意識して学んでもらうための第一歩は、教職員自らが「今」を知

り、将来を見通す仕事をしたいと心底願うことである。確かに不透明感が漂い、時代の潮流は見定めにくい。だからこそ、次代に向けた人材育成の責任とは何かを問い、想うところを形にするための挑戦を大切にしたい。そして、この挑戦は「失敗から学ぶこと」、「再チャレンジすること」と表裏をなすものでなければならない。

これからの大学のあり方、教育のあり方に係る価値観やビジョンは、決して一つの専門分野から生まれ出るものではない。実際、専門という枠を超えて知識や情報、技術等を瞥見してみると、刮目すべき「気づき」に巡り合うことも少なくない。このような「気づき」は、新たな意味づけや思わぬ腹落ちをも促す。いわゆる矛盾として一蹴してしまいがちなことの多くは、必要な梯子を手にしていないがゆえにそう見えるだけである。異なる景色を見ようとせず、「あの時おろそかにしたツケが回る」ということだけでは何としても避けない。まさに「ときは今」なのである。

【参考（刊行順）】

- 小林傳司『トランス・サイエンスの時代』2007年6月、NTT出版
神野直彦『「人間国家」への改革』2015年6月、NHK出版
エリン・メイヤー『異文化理解力』田岡恵監訳、2015年8月、英治出版
齋藤孝『「文系力」こそ武器である』2017年10月、詩想社
ジリアン・テット『サイロ・エフェクト』土方奈美訳、2019年5月、文藝春秋（文春文庫）
マシュー・サイド『多様性の科学』トランネット（翻訳協力）、2021年6月、ディスカヴァー・トゥエンティワン
一般社団法人日本私立大学連盟『ポストコロナ時代の大学のあり方』デジタルを活用した新しい学びの実現』2021年7月
荻谷剛彦『コロナ後の教育へ』（再版）2021年8月、中央公論新社
杉林堅次『「想像」が「創造」を生む薬学教育と薬剤師』2021年12月、評言社
村上陽一郎『エリートと教養』2022年2月、中央公論新社
一般社団法人日本私立大学連盟 国際連携委員会『グローバル教育の拡充―国際教育・連携の視点から―』2022年3月